

# 第73回 近畿地区卒業設計コンクール応募作品一覧

平成31年4月13日  
日本建築学会近畿支部

《短大・高専・専修学校の部》

No.	作品名	学生氏名	所属	図面枚数
1	新しい現場事務所のカタチ	垣本 裕季	大阪工業技術専門学校 建築設計学科	27
2	SEASIDE EVERLASTING	何 家駿	中央工学校OSAKA 建築CGデザイン科	14
3	緑の力 -ゴルフ場跡地を利用した里山整備計画-	中尾 康宏	京都建築大学校 建築学科	7
4	人が歩く、新しいまちの中心 ～鯖江駅とそれを中心に広がる新しいまち～	矢部 洋行	京都建築専門学校 建築科二部	9
5	<a href="#">みちひらき</a> <a href="#">-中途視覚障害者のための暮らし場の提案-</a>	森崎 加鈴	明石工業高等専門学校 建築学科	6
6	無人島と 棲む処 Uninhabited island and why they live there?	岩田 美紅	京都建築大学校 建築専攻科	8
7	Miotsukushi Corridor	武田 能通	大阪工業技術専門学校 建築設計学科	10
8	幼×小×中 open school, mixed school.	山本 恭輔	京都建築大学校 建築学科	13
9	海に沈むまち -普遍的な暮らし-	吉川 知編	京都建築専門学校 建築科二部	2
10	<a href="#">えいがしま市場の家</a> <a href="#">-明石市の児童養護施設-</a>	菅 智子	明石工業高等専門学校 建築学科	6
11	<a href="#">更新する建築</a>	中島 太郎	修成建設専門学校 建築学科	9
12	神道 ～「神のみち」普請による祭りの再構～	岡田 結以	京都建築大学校 建築専攻科	6

(受付順) 以上12点<No. 欄に○印のものは入選作品>

《工業高校建築科の部》

No.	作品名	学生氏名	所属	図面枚数
1	<a href="#">自然化する人工の創造</a> <a href="#">Grass - Industrial</a>	細川 悠人	大阪市立工芸高等学校 建築デザイン科	4
2	自然の中で過ごす休日 ～寛・楽・心・和・癒～	日根野 秀平	滋賀県立彦根工業高等学校 建設科	7
3	植栽からの贈り物 木漏れ日資料館	赤堀さくら 井出結歌 小川鈴音 川添瑠花 灘 千夏	大阪市立工芸高等学校 インテリアデザイン科	6
4	図書館	奥田 響	奈良県立奈良朱雀高等学校 建築工学科	8
5	みんなの子ども園	渡邊 美咲	滋賀県立彦根工業高等学校 建設科	7
6	<a href="#">草木架橋</a>	松本 明莉 永田 日向生	大阪市立工芸高等学校 インテリアデザイン科	6
7	アートミュージアム	平重 希	奈良県立奈良朱雀高等学校 建築工学科	4
8	Space that leads ～つながる空間～	井上 舞香	大阪市立工芸高等学校 建築デザイン科	4

(受付順) 以上8点<No. 欄に○印のものは入選作品>

日本建築学会近畿支部  
平成30年度近畿地区短大・高専・専修学校並びに工業高校  
卒業設計コンクール（第73回）審査報告

平成31年4月13日（土） 審査会場：大阪科学技術センター（6階600号室）

審査員長（互選） 松原 茂樹  
審査員（50音順） 槻橋 修・橋寺 知子・畑 友洋・福原 和則・増岡 亮・柳沢 究  
応募作品 短大・高専・専修学校の部12点、工業高校の部8点（別紙参照）

### 審査経過と審査講評

審査を始めるにあたり、コンクールの主旨と審査に関する内規、前年度の実績と本年度の応募状況を確認した。

はじめに、互選により審査委員長の選定を行った。当日は審査員7名のうち1名は都合により欠席であった。2名は前日までに審査を行い、その結果を当日の記名投票の集計に加えることにより参加とし、計6名で審査した。当日出席した4名の審査委員から互選により審査委員長を選定し、審査を進める事とした。

まず、昨年度の審査方法を確認し、今年度の審査方法について協議をおこなった。本年度は、短大・高専・専修学校の部は応募作品が12作品と昨年度と同程度であり、昨年同様に内規の上限である3作品を入選作品として選ぶ方針とした。また工業高校の部は応募作品が8作品と昨年度と同程度であり、今年度は2作品を上限に入選作品を選ぶ方針とした。

選出については、各審査員が各自で全作品を閲覧した上で、短大・高専・専修学校の部については各自3作品、工業高校の部については各自2作品を選んで投票し、その後、投票結果を踏まえて全員で審議をおこない入選作品を決定することとした。

投票の結果、短大・高専・専修学校の部は、No.5とNo.10が過半数を超える得票を集め、意見交換ののちに入選作品にふさわしいとして全員の賛同を得た。講評の詳細は各選評に譲るが、いずれもテーマ設定、リサーチ、計画、図面表現、プレゼンテーションがバランス良く優れていることを評価した。残る1作品について得票のあったNo.3、No.7、No.8、No.11、No.12について議論を行った結果、No.11を入選とした。No.11は一部教室としての機能を満たしていない点があったが、他4点に比べテーマ設定、リサーチ、図面表現、プレゼンテーションが優れている点を評価した。

得票があったが入選できなかった作品は共通して図面表現が弱く、どのような建築を設計したのかが表現されていない点が課題であった。個別にみると、No.3は使われなくなったゴルフ場を里山に戻す計画であり、敷地の形状に合わせて建物のボリューム・形状を考慮した設計が優れているが、開口部を介した建物内外の関係、構造・屋根架構の表現が不足している点が惜しまれた。No.7は大阪市内を走る阪神高速道路の下に着目し、自転車を利用するというアイデアや周辺敷地も巻き込んだ大胆な提案が優れているが、建築としての提案に粗さがある点がマイナスとなった。No.8は都心部の敷地で立体的に教室等を積み上げた学校を提案し、視覚的な連続性を担保しながら教室を積み重ねる点や造形が優れていたが、すべてが開放的な教室であり機能的に適切であるか疑問があり、また敷地周辺との関係についても考慮されていなかった点が評価できなかった。No.12は水路を使った伝統的な祭りが橋によって遮られてしまったので、それを取り戻す点と日常的な橋の機能を満たすという両立を行った提案が優れていたが、どの橋も同じような機能・設計であり、きめ細かい橋の計画・設計ができていない点が惜しまれた。

工業高校の部では、No. 1 と No. 6 が 5 票を集め、両者とも他に比べて完成度が高い点で入選とすることで合意を得た。詳細は各作品の講評に譲るが、特に破綻なくまとめ上げた計画・設計の技術力や自分が考えたことや設計した建物をしっかりと表現できている点が優れていた。他に得票のあった No. 3 と No. 8 をみると、共通して建物の設計はよくできているが建物と建物の関係や建物と敷地との関係が十分考慮されていない点が評価できなかった。得票のなかった作品はいずれも図面表現は良かったが建物の機能的に満たしていない部分がある点が惜しまれた。

一昨年、昨年、今年と次第に作品の応募が増えていて、社会のありようを捉えたテーマの設定やそれに対する建築としての提案で多様な作品に触れることができた。残念ながら得票に至らなかった作品もそれらの点で個々に評価できる点があった。なにより今年も真摯に建築に向き合った意欲的な作品に触れることができたことは審査員一同喜ばしく感じている。

(松原)

### みちひらき -中途視覚障害者のための暮らし場の提案-

森崎 加鈴君 (明石工業高等専門学校)

視覚に障害のある方を支援する福祉施設・京都ライトハウスに隣接する敷地に、中途視覚障害者のための生活支援施設を提案する作品である。中途視覚障害者は、途中から視覚を失うことで、より困難や不安を感じる。そんな状況に対応するきめ細やかなサポートのための施設(コト場)と、生活の場(すまい場)、就労の場(はたらき場)、晴眼者も利用する活動・交流の場(まなび場)を計画し、それらをゆるやかに「みち」でつなぐ。千本通沿いは、はたらき場として町家の並ぶ景観が再生され、支援施設が特別なものでなく、街と緩やかにつながる地域に開かれた場としている。視覚を失うと他の知覚を総動員して空間把握がなされる。この提案では、光や風の扱い方や床や壁の素材の違いで、それぞれの場所や空間の変化が認識できるよう工夫されており、視覚だけに頼らないデザインとそれをわかりやすく丁寧に図面で表現した点が高く評価できる。

綿密な調査とそれに基づいたプログラムの立案、社会的課題に対して建築デザインが直接的に貢献できる点を見きわめた説得力ある展開と表現であり、卒業設計として時間をかけ、真摯に取り組んだ成果と思える。

(橋寺)

### えいがしま市場の家 -明石市の児童養護施設-

菅 智子君 (明石工業高等専門学校)

空き店舗が目立つようになった総合市場の店舗を再配置して集約することで余白をつくり、そこに児童養護施設を設けることでにぎわいを取り戻そうとする提案である。施設の子供たち、市場の人、まちの人の関係を想定し、お互いに助け合う関係を構築することでにぎわいが生まれる様子をカレンダーと共に生き生きと描き切った。

空き店舗に囲まれてバラバラに存在していた店舗は、新たなにぎわいが生むために前面道路に面した位置にまとめて配置された。店舗間の隙間には中庭へとつながる路地状の出会いの道が設けられ、そこを抜けると子供の家や子供食堂に囲まれた別世界のような中庭に遭遇する。中庭は三者が使えるみんなの広場であると同時に、適度な

距離感を保つバッファーとしての役割も果たしていて、絶妙な距離感が相互に使いやすい空間を形成する。2階は子供たち専用の居室と屋上をぐるぐる回れるデッキになっていて楽しそう。

(福原)

## 更新する建築

中島 太郎君 (修成建設専門学校)

ベトナムと日本における社会的背景を踏まえ、ベトナムのホーチミンに計画した建築職業訓練学校の提案である。敷地全体を覆うように共用スペースなどを含む「固定部分」を上部に、教室や演習室を含む「更新部分」を下部に配置した2層からなる。「固定部分」は吊り橋の原理を利用した構造計画とし、そこにランダムに配置した吹抜けを通じて、「更新部分」との立体的なつながりを生み、かつベトナムの自然環境に配慮した構成は豊かな空間を想起させた。「更新部分」は、学生が企画・計画から施工までを一貫して、学びながら建設するという建築技術者を養成するための教育プログラムおよび可変的な空間構成に、建築教育施設の可能性が見てとれた。「固定」「更新」ともに構造面および設備面に関する検討すべき課題が散見されたが、ベトナムの地域性を盛り込みかつ建築学校の可能性を追求した点、作成者の提案力および表現力の力量を総合的に高く評価した。

(増岡)

## 自然化する人工の創造 Grass - Industrial

細川 悠人君 (大阪市立工芸高等学校)

地熱発電と、その発電所における熱源を利用した植物園としての新しいインフラスペースの提案である。東日本大震災によって強く顕在化し、今後国として本格的に検討を行う必要があるエネルギー問題に対し、地熱を熱源とする発電インフラの設定の合理性を、自分なりにリサーチし、我が国において実現性及びその可能性を示している点は大変意義深い。

そのうえで、単に発電所を計画することに留まらず、「どのような」発電所であれば、私たちの社会が受け入れ可能な場所となるのかという検討を行い、排熱利用による植物園という機能をオーバーラップさせているところが特に評価できる。この開かれたみんなの庭を小気味よくドローイングによって具体的に示しているところを見るにつけ、作者のこれからの社会を見据えた温かで力強い眼差しを感じた。

(畑)

## 草木架橋

松本 明莉君・永田日向生君 (大阪市立工芸高等学校)

この作品は大阪・天王寺動物公園の上空にかかる歩行者橋の橋上を再開発し、植物による緑化を軸にした温室やカフェ、ライブラリーといった草木に親しむパビリオン群によって、観光地にもなっている公園と街とをつなぐ場となることを目的としたプロジェクトである。インバウンドに沸く大阪・ミナミの現状と、都市のヒートアイランド現象の解決に寄与すると

いう明確な目的とともに、都市における観光客のあり方について住民との交流機会の創出をプログラムに盛り込んだ点は、現在の日本において交流人口を年の活力として再評価し、定住人口とともに都市のプレイヤーとして位置付けるニーズにも合致しており、現代的な課題であると言える。

プレゼンテーションも明るくわかりやすい印象で優れているが、200 m 近い長さのあるブリッジ状において、全体のランドスケープ計画やパビリオンのデザインに関して、一貫性に乏しく、個別の表層的なデザインにとどまっていることが今後の課題であろう。橋上のパビリオン群だけでなく、眼下の動物公園や周辺の都市景観との関係性を考え合わせて検討すれば、より完成度が高まるだろう。

(槻橋)